

人新世の記号論

吉岡 洋（京都芸術大学 文明哲学研究所）

本発表の目的は、人新世における記号論の新たな可能性を探究することではない。むしろそうした課題において前提されている「人新世」という表象の働きを批判的に検討しようとするものである。「人新世」とは確定した事実ではなく、とりあえずは一つの記号である。それは、人類の文明活動がついには地質学的なスケールで地球環境に影響を及ぼすに至ったという宣言を含んだ記号であると言える。だが「人新世」を確定された科学的事実として語るとは、私たちの世界観に決定的な影響を与える。

20 世紀後半以降における自然開発、核エネルギー利用、人口増加、全世界的な産業化といった変化を背景に、1972 年のローマクラブ第一回報告「成長の限界」から、より最近では気候変動枠組条約締結会議（COP15）においてヨハン・バックストロームらが提唱した「惑星的限界」まで、環境問題に関する言説は「限界」という比喩に貫かれている。それはまた巨大隕石の衝突のような事態に喩えられる。だが白亜紀末（6,500 万年前）の地球的激変と人類の文明活動による環境への影響を並べるのはあまりにもアンバランスである。

「限界」は地球の自然の中にではなく、むしろ人間の認識能力の内にあるのではないか。このことを、スピノザ哲学を参照しつつ考察したい。人間は自らの想像力を越えた宇宙の姿を、人間的なスケールに翻訳・圧縮して直観する。その意味で「人新世」とはいわば地球の人間化であり、それが導く環境主義的な言説の根底には、個人や歴史を宇宙的な時間の中に意味づける終末論的な言説が作動しているのではないかと思われる。

最近では、スティーヴン・E・クーニンの『気候変動の真実』など、環境危機を煽る行き過ぎたジャーナリズムや政治的言論に対する批判も出始めた。もちろん、人類の文明活動が地質学的スケールの変化をもたらさないと断定することはできないが、現段階においては「人新世」は科学的事実としてよりはむしろ、言語的・記号的な現象として解釈する方が妥当ではないだろうか。そうした観点から、本発表では「人新世」という記号が現代の知的世界においてどんな影響を及ぼしているのかを検討してみたい。

参考文献

スピノザ『エティカ』 工藤喜作・斎藤博訳、中央公論社、2007 年

Paul J. Crutzen, *A Pioneer on Atmospheric Chemistry and Climate Change in the Anthropocene*, SpringerBriefs on Pioneers in Science and Practice Book 50, 1st ed. 2016.

斎藤幸平『人新世の資本論』集英社、2020 年

スティーヴン・E・クーニン『気候変動の真実 科学は何を語り、何を語っていないのか?』

三木俊哉訳、日経 B P、2022 年